

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

## 「子どもが大きく変わる時期」

「特別支援教育の扉No.59」で、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」では、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合が、推定8.8%であると紹介しました。学年が上がるにつれて割合が低くなっており、小学6年から中学1年、中学2年から中学3年、そして、中学3年から高校1年の移行期に減少率が大きくなっていると説明しました。それを裏付ける事例を紹介します。

### 1 小学6年生Sさん（通常の学級 自閉スペクトラム症 服薬中 支援員配置）

Sさんは、授業を妨害することはないが、学習内容と関係のない活動をするが多かった。中学校でも支援員配置を継続しながら、通常の学級を考えていた。しかし、家庭の都合で他地区の中学校へ入学することが決まっており、その進学先である中学校の教育相談を実施した。校内参観では、特別支援学級も見学し、担当者から丁寧な説明を受けた。Sさんと保護者は、自分らしく学べる場、自分らしくいられる場である特別支援学級のよさに気付き、交流及び共同学習もできる特別支援学級に入級することを決めた。

### 2 中学3年生Kさん（特別支援学級 知的障害 不登校）

Kさんは、中学校に入学してから、年間数えるほどしか登校できていない状況であった。改めて、Kさんの実態を把握するために検査を実施したところ、小学5年生の時は「境界域レベル」だったが、今回の結果は、知的発達水準が「非常に低いレベル」だった。学習の空白も影響しているが、進路選択に当たっては、Kさん及び保護者の希望を尊重するとともに、検査や学習状況の結果を基に自己理解を促しながら、学校見学・体験をすることにした。その結果、Kさん自身が納得して特別支援学校高等部を受検することにした。

### 3 中学3年生Tさん（通常の学級 自閉スペクトラム症 不登校）

Tさんは、中学1年生の途中から、「勉強が分からない、友達がいない」などの理由で不登校となった。現状を打開するために、学校は家庭訪問をしたり、保護者は専門機関に相談をしたりしていたが、大きな変容は見られなかった。3年生となったときに、医療機関を受診し、自閉スペクトラム症の診断を受けた。利用していた専門機関では、「進路」をキーワードに、Tさんに「あなたの好きなことは？」「なりたい自分は？」など、自分と向き合う時間を設けて、将来設計と一緒に考えた結果、高校受検を目指す目標ができた。

三つの事例に共通していることは、受検や進路先選択を考える時期に伴って本人が変わりたいという気持ちを強くもてたこと、実際に学校見学や体験学習を実施して具体的なイメージをもてたこと、検査や診断結果、他者からのアドバイスや励ましを参考にして自分と向き合う中で自己理解が進んだことが考えられる。子どもが変わるためには、「周囲の気付きと温かな励まし」、「本人の新たな側面への気付きと正しい自己理解」が大切となる。卒園・卒業、進級に向けてまとめの時期に入る。子どもが一年の中で一番大きく変わる時期でもある。「あと少し、もう少し」子どもたちと一緒に走ろう！



**とれたて直送便**



「ポジティブな見方・考え方」



「子どもの望ましい行動を見つけて分かりやすく伝える→子どもは自信をもてる、どうすればよいか分かる→前向きで意欲的になる→もっといいところを見付けようとして望ましい行動が増える」というプラスのサイクルが回り始める。子どもの望ましい行動に注目し、ほめる・認める・励ますことが大切である。もちろん頑張っている自分自身もほめよう！